

このところ、近頃の日本映画を続けてみる機会を作り片山慎三『雨の中の慾情』（2024）、森ガキ侑大『愛に乱暴』（2024）、城定秀夫『悪い夏』（2025）、大友啓史『宝島』（2025）、大九明子『今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は』（2025）、永田琴『愚か者の身分』（2025）、源孝志『木挽町のあだ討ち』（2026）を次々と思いつくままに見てきました。中堅・若手の才能の発揮と開花、また女性監督の躍進を目の当たりにし頼もしさは感じたものの、どうにも欲求不満の状況に陥り、1960年代から1970年代の作品に立ち戻ってしまう羽目になってしまいました。過ぎ去った景色への愛着か、「かつてあった」という感覚の傷跡を感じるためか、その辺りは明確ではないものの、今では埋もれてしまった、または埋もれてしまいそうな作品群を探すという行為の方により大きな興味を持ったままです。そうした中から、何本か取り上げてみたいと思います。

まず、鈴木英夫『悪の階段』（1965東宝作品）から。鈴木英夫（1916-2002）は日大芸術学部を卒業後、新興大泉撮影所に入り、1943年には東宝、1944年には大映東京、戦後は1953年に新東宝、そして1954年から東宝で活動しています。鈴木英夫監督について、日本を代表する美術監督である木村威夫は、「『蜘蛛の街』（1950）で初めて組み、演出家としての純粋さに敬服した」と言います。また、大映時代に田坂具隆監督に師事したせいも、克明で妙な妥協は許さないスタンスであったともあります。本作は、山崎努、加東大介、西村晃、団令子といった強力演技陣を揃え、現金強奪の犯人グループの犯行後の仲間別れを描いたものであり、その月並みな筋書きから、人間の弱さや強欲さ悪質さが丁寧にしかも緊張感をもって描かれた秀作です。中でも、団令子の女優としての幅広い演技能力に驚かされます。日本映画のネオ・ノワール・クライムのジャンルの作品としては、篠田正浩の『乾いた花』（1964）と双璧をなす作品と言ってもいいのではないのでしょうか。野望の果てのニヒリズムが冷徹に描かれます。

次に石井輝男（1924-2005）監督『東京ギャング対香港ギャング』（1964）ですが、1964年1月1日封切という正月映画で、鶴田浩二、高倉健と顔を揃えた東映初の海外ロケーション作品です。スケジュール上の問題か、鶴田浩二と高倉健とが顔をあわせるシーンはありません。それでも、ラストの両ギャング団による銃撃戦は、井上梅次監督が東映で撮った『暗黒街シリーズ』（1962-1964年）での恒例の大銃撃戦を踏襲し、正月映画に相応しい賑わいを作り上げます。石井輝男と井上梅

次（1923-2010）とは、共に1947年に設立された新東宝の第一期生という関係でもあります。当時東映東京撮影所所長の岡田茂の企画作品であり、荒っぽいように見えて仲々の確な顧客セグメントを行っての商品の提供を行うという氏の経営スタイルが十分に感じられる作品です。

工藤栄一（1929-2000）監督『日本暗黒史 血の抗争』（1967）は、工藤栄一独自の集団時代劇の要素をやくざ映画に取り入れ、後の実録やくざ映画の先駆と見なすべく秀作です。慶大法学部を卒業後東映に入社し、1954年に企画部から東映京都撮影所に移り、マキノ雅裕、松田定次、佐々木康の助監督からスタートしたキャリアは、東映の時代劇全盛時から始まります。40年近くに及ぶ活動期間は、白塗り時代劇の時代から松田優作という稀有な俳優の活動期間にまで続き、極めて進取の気象に富んだ性格を表します。年代的は先に述べた石井輝男と近い世代であり、共にこの時代の東映のプログラムピクチャを支えた大きな柱でした。本作の企画も岡田茂が絡み俊藤浩滋、日下部悟朗といったこれまた東映を支えた个性的な強力チームによるものです。安藤昇という特殊なキャラクターを生かし、永山一夫（在日の俳優でNHKや東映で活動、1975年に万景峰（マンガョンボン）号で北朝鮮に帰還、その後消息不明）の好演、嵯峨三智子の怪演が光る作品です。工藤栄一の時代感覚は決して錆びつくことはなく、常にスタンダードを超え、映像の刺激的な存在として観客の一步先を提示し続けたといえるでしょう。1981年に発表した松田優作との『ヨコハマBJブルース』は二人の美学が融合した贅沢な特上の一本でありました。

日活の作品からも一本取り上げましょう。長谷部安春（1932-2009）監督『縄張（シマ）はもらった』（1968）です。おそらく経営不振に陥りはじめた頃でもあり閉塞感漂う日活の中にあり、惜しげもなく新旧スターを投入しての作品です。小林旭、宍戸錠、二谷英明、葉山良二、川地民夫、鉄鉾治、藤竜也、太田雅子（後の梶芽衣子）とは実に豪華です。全国制覇を目指す大組織の組の鉄砲玉として遣わされた小林旭をリーダーとする一団のこれまた月並みの騒動が起こるわけですが、ラストの小林旭、宍戸錠ら四人の殴り込みシーンのシチュエーションは何かの『ワイルドバンチ』（1969）と酷似しているではありませんか。しかも、サム・ペキンパーより一年早い時期に。（1971年公開の深作欣二監督『博徒外人部隊』はサム・ペキンパーの影響が強く感じられる作品でした）筆者にとって、長谷部安春という監督は評価の定まらないところがあるのですが、傑作『流血の抗争』（1971）に次ぐ作品ではないかと高く評価します。高速ズームやクイックパンを用いた

カメラワーク（撮影は上田宗男）も効果的であり、殺伐とした風景を描きながらも抒情性が感じられ魅力的です。

今回登場させた四人の映画監督に共通するのは、日本映画界が大きく転換した時期、つまり倒産・コンテンツの変更、また製作から配給体制の充実に方向を変えた映画会社の経営手法の陰で映画を撮るにはあまりにも過酷な条件をクリアしなくてはならず、TVの世界に活動の場を替えた、もしくは替えざるを得なかった実情です。実際にはその傾向は、既に1960年代後期から始まっていました。鈴木英夫は1967年以後はTVに主力を注ぎ100本以上の作品を残しています。石井輝男しかり。「必殺仕事人」（第1期1979~1981年）を。工藤栄一も「新必殺仕事人」「傷だらけの天使」（1974~1975）「探偵物語」などを。長谷部安春は「大都会PART2,3」「あぶない刑事」「探偵物語」「相棒」といったレヴェルの高い良質なコンテンツの提供を行っています。銀幕からブラウン管への才能移転というべき事象であり、TVへの映画自体の持っていた徹底した映像美と構図が移入され、そのレヴェルの底上げに繋がったのは紛れもない事実です。